

芭蕉の旅(一)

——故郷回帰と『野ざらし紀行』——

松 隈 義 勇

一 西への旅

芭蕉は二十九歳で江戸に出て以後の、二十二年間にわたる俳諧師としての生涯のほぼ半ばを旅に過している。その総計十年に及ぶ旅暮しの内容を概括して示すと、左のとおりである。

〔芭蕉の旅・要項一覧表〕

延宝四(一六七六) 33才 夏、帰郷。十数日伊賀に滞在。

〔初めの帰郷の旅〕

天和二(一六八二) 39才 十二月から甲斐流寓。

〔江戸大火類焼避難〕

天和三(一六八三) 40才 五月に帰る。

〔甲斐流寓の旅〕

貞享一(一六八四) 41才 八月、帰郷の旅に立つ。畿内・尾張・美濃歴遊。郷里で越年。

〔野ざらし紀行』の旅〕

貞享二(一六八五) 42才 畿内を巡って、四月帰東。

〔野ざらし紀行』の旅〕

貞享四(一六八七) 44才 八月、鹿島への旅。

〔鹿島詣』の旅〕

十月、帰郷の旅に立つ。鳴海・熱田・名古屋巡遊の後、十二月中旬郷里に着き、越年。

元祿一(一六八八) 45才 春から初夏にかけ、伊勢・吉野・大和

から須磨・明石を巡遊、四月入洛。

〔笈の小文』の旅〕

六月、尾張に入り、八月、木曾・更科を経て帰東。

〔更科紀行』の旅〕

元祿二(一六八九) 46才 三月末から八月末まで、奥羽・北陸巡

遊、大垣に至る。

〔おくのほそ道』の旅〕

九月、伊勢に行き、下旬、郷里に入る。

十一月末、奈良・京都を経て、膳所で

元禄三(一六九〇)

47才

越年。

新春、郷里に帰り、三月膳所に戻る。

四月、幻住庵に入り、七月まで在庵。

以後木曾塚在庵。

九月末、郷里に帰る。冬京都滞在。大

津で越年。

元禄四(一六九一)

48才

一月上旬から三月末まで郷里滞在。間に奈良へ赴く。

四月から八月まで京都滞在。以後湖南

滞留。

十月、江戸帰着。

『おくのほそ道』の後の旅)

元禄七(一六九四)

51才

五月、帰郷の旅に立つ。約二十日、在郷。以後、湖南・京都などに滞在。

七月中旬から再び在郷。

九月上旬、奈良から大阪に至り発病。

十月十二日、病没。

〔終焉の旅〕

この概観によってわかることは、芭蕉の旅の大半は西上の旅であったということである。ことに大きな旅はことごとく西へ向かっていく。その西とは、すなわち畿内であり、少し範囲を広げれば、東は尾

張・美濃までを含む近畿一円である。その中心となっているのは、伊賀上野と湖南、および京都ということになる。ことに郷里伊賀上野が終始足だまりの役を果していることは一見して明白である。

大きな旅のうち、『おくのほそ道』の旅だけが北へ向かっている。

ただし、この旅にしても、紀行文の素材となった部分は東北・奥羽への旅であったには違いないが、それはわずか五か月間に過ぎない。この後に続く畿内滞在は——それを旅と呼ぶなら——まるまる二年二月に及んでいる。通説では、この畿内滞足を、大旅行の疲労をいやすためのものと解せられているが、はたしてそれだけだろうか。

思うにその関係はむしろ逆で、芭蕉はこのころかなり激しく彼を襲ってきていた帰心に促されて、畿内への旅を思い立ち、そのついでにかねて念願していた奥羽行脚の旅を果したのではなかっただろうか。

つまりこの旅は奥羽・北陸まわりという大迂回を組み込んだ帰郷の旅であったように私には思えてならない。そうしなければ、後の郷里及び畿内滞在の余りに長かった謎はどうしても解決できない。この旅を奥羽旅行が主目的であったと思ひ込むのは、大傑作の紀行文『おくのほそ道』の光輝に眩惑されての錯覚であろう。

こういって、みちのくの旅が芭蕉にとって生涯最大の旅らしい旅であり、芸術家として最も意義ある旅であり、かつ行脚・漂泊と称するにかなった旅であったという事実を目を瞑るものではない。あるいは、この旅の後の畿内の巡遊が、旅というよりむしろ滞在という語がふさわしいような内容と性格のものであったという事実からすれば

元禄二年の旅は、まさしく大垣までで終っていたのである。

二 郷里滞在

話をもとに戻して、延宝四年の帰郷の旅から検討していきたくないのであるが、しかしこの旅に関しては、一時京都に出たという(注1)ことなどのほか、多くを知ることとはできないし、その目的も明らかでない。帰東に際して猶子桃印を伴ったらしいが、それだけが目的の旅だったのかどうか。その後の帰郷の旅の事情から推して、帰郷そのものが目的だったかと思いがたいような旅であった。

『野ざらし紀行』の旅となると、とにかくこれは明らかに帰郷そのものを目的とする旅であったように思われる。すなわち、その前年に母を失った、その墓参を果そうとしたのである。副次的な目的としては、大垣の谷木因訪問の約を果すこともあったらしい。

『野ざらし紀行』の冒頭を占める「野ざらしを心に」の句やその前文などに引かれて、この旅の動機を俳諧一筋に踏み切った心境において死を賭けた悲愴な決意のあらわれと見るのが従来の通説であった。それを、何らかの現実的用途ないし目的をもったものだとし、前記の

ように亡母の墓参と木因訪問を挙げたのは、米谷巖氏である。(注2)

この旅を見ると、往路に伊勢を回り、郷里伊賀上野に数日を過ぎた後、畿内各地から大垣・熱田・名右屋と席の暖まる暇もないほど歩き回っているが、しかし郷里にあること一か月半余。貞享二年の新春もここで迎えている。全体に俳諧行脚の趣のあることは蔽いがたいが、

やはり郷里を足だまりとし、ここに留まることを旨としたことは疑う余地がない。帰郷の旅と称し得るゆえんである。

次の『笈の小文』の旅も同じく帰郷の旅である。ただし、その目的とするところは甚だしくあいまいである。貞享五年二月に行なわれる予定の亡父の三十三回忌法要に参列する心算があったようだが、これとても是非ともというほどのことでもない。だいたい『笈の小文』という作品じたいまとまりのない、謎の多いものであるが、その上に、書簡その他決め手となるべき適当な資料を欠いているのである。米谷巖氏もこの旅を「『風狂』の実践」(注3)と規定されているが、そうとよりほか言いようがない旅であろう。

往路に三河・尾張などにゆっくり足を駐めており、花盛りの吉野に登ったのを頂点として、その他高野山・和歌浦・奈良・須磨・明石などを巡遊、さらに帰路には木曾・更科に遊んでいる。このように、この旅は名所遊歴の観があるが、しかし郷里にあることは前後総計約二か月に及んでいて、前回の旅の在郷日数を上回っている。このことを無視することはできない。

前にも触れた『おくのほそ道』の旅後の畿内滞在中に郷里に帰ったのは前後四回に及び、在郷日数は総計九か月になんなんとしている。

この事実によってこれを見れば、元禄二年から四年にわたる旅が帰郷を要件としたものであったことは疑い得ない。前述した通りこの帰郷が一種の内的衝迫のようなものによって企求されたものであったといっても、それほど当を失ったものではないであろう。

しかも、郷里滞在日数が初めの旅、『野ざらし紀行』の旅、『笈の小文』の旅、『おくのほそ道』後の旅と、回を重ねるごとに増していることの意味は重視されてしかるべきものとはいえないであろうか。

終焉の旅は、旅先で没したので、郷里滞在の日数を統計的に示すことはできないが、大阪に行くまでの間、湖南巡歴を挟んで、総計二月余も郷里に足を駐めている。もしも生きて大阪から帰っていたら、前回のそれを上回る日数を在郷にあてただろうと思われる。

芭蕉は、年齢を重ねるに従って、故郷に足が向き、故郷から離れがたくなっていったようである。

三 江 戸

芭蕉の住居は疑いもなく江戸にあった。下里知足の「知足齋日々記」に「江戸深川本番所森田惣右衛門御屋敷松尾桃青芭蕉翁云々」とあるのによれば、これが正式に登記された住所であろう。住所不定者は無宿者として咎められる幕藩体制下においては、その公的な住所が明確であることが絶対必要であった。芭蕉の住居は時に移動したこともあったが、壮年期以後の最も主要な半生を、この深川の隅田河畔の地において過し、そしてその半生の半ばは確かにこの地に身を置いたのであるし、芭蕉自身も江戸の住人と考えていたからこそ、江戸を離れることを旅と呼んでいたのである。従って、伊賀の郷里に滞在することも旅の一つとなるのである。

しかしこれは、世間的、常識的、外面上のことであって、芭蕉の内

面においても、はたしてそうであったかは、簡単に結論は下せない。そのいわゆる旅の間に、郷里に足を駐めた月日や、その旅を思い立ったそもその動機を考えると、芭蕉の内面的な居住地は伊賀上野赤坂町松尾半左衛門方であったとしても決しておかしくはなく、居住と旅との関係はまるきり逆になるであろう。

そうとすれば、芭蕉の内面では江戸に在ることのほうが、仮住居であり、旅であったわけである。この事情は今日の東京居住者の大部分にもあてはまる。いわば東京は出稼ぎもの流れ者の仮住居の場所なのである。異郷にある思いのまま大都会の虚しい殷賑と喧騒と汚濁の中に埋没しつつ、生活のために日夜あえいでいるのである。

芭蕉とても、生活の資を得、名を成すことを求めて江戸に出てきた流れ者で、辛苦して、世俗的にはとにかく一応ひとかどの俳諧師となることができた後は、生活の場所としての江戸を離れることはできなくなっていた。

外形的には故郷に行くことが旅であり、内面的には江戸に在ることが旅であるとしたら、生涯のすべては、旅である。人生即旅という考えが育つのはけだし当然であろう。

『野ざらし紀行』の旅に出発するにあたって詠んだという

秋ととせかへつて江戸さすを指故郷

の句が問題である。故郷伊賀を出て江戸に過すことすでに十年、故郷に向っての旅に出で立とうとすれば、その長く暮した江戸をさしてか

えって故郷と言いたい思いが強い、という句意である。これを額面どおりに受け取るなら、真の故郷伊賀を否定し、江戸に軍配をあげたことになるわけだが、はたしてそうだろうか。

もちろん、十年も苦渋のうちに住み経てきた江戸は、それなりに生活の根づいた所であり、切っても切れない強い人間関係もできている懐しい所である。第二の故郷といってもいい土地である。そのことに嘘はない。嘘はないが、しかし、その第二の故郷という言い方じたいまた他郷を第二の故郷と意識するその意識のしかたじたいが、その裏にまことの故郷への忘れ難い思いが底深く息づいていることの証左である。

江戸を故郷と考える思念を内からくつがえし、伊賀にむかって突き上げてくる思郷の情念がある。それを、自分には故郷はないのだ、伊賀は故郷ではないのだぞ、と自分に言い聞かせ、江戸こそが故郷だと納得させようと努める、その二律背反の苦しみ、悲しみを表白したものが「秋十とせ」の句なのではないだろうか。

こう理解するためには「却て」という語に注目する必要がある。「却て」とは常理や自然と反対であることを表わす。江戸を故郷と指すことは常理・自然に背いていると考えているわけである。自分をしめて江戸を故郷と指すようにさせる原因は、江戸への愛着が並みはずれて強い場合か、逆に故郷への思慕が激しいのを抑えて江戸へ振り向けようとする屈折した心理による場合か、この二つのいずれかであるが、ここが後者であることはいうまでもない。

「秋十とせ」の「秋」にも注意する必要がある。これは折りしも秋であったという季語だけの働きではあるまい。江戸での年月を「秋」と把握しているのである。それは前文にある「江上の破屋をいづる程風の声そぞろ寒げ也」と表現された「秋」なのである。辛酸の年月であり、悲寥の歲月であったことが顧みられているのである。そういう過去が貼り付いている江戸だから故郷と指したいのだという気持もあるだろうが、一方では、そのように江戸を指して故郷とせざるを得なくさせた、その運命なり心の傷手なりも、風の声のそぞろ寒げに身に泌みわたる「秋」によって、象徴的に表わされている。

要するに「秋十とせ」の句は、故郷から棄てられた流浪者の切々たる思郷のおもいのたけを、裏から逆説的に表現したものであるというべきである。米谷巖氏も次のように述べている。

……(この句は)伊賀の山中への帰心矢の如き心につき動かされての旅立ちであったことを、逆に裏書きしているといえよう。(注4)『野ざらし紀行』の旅は、亡母の墓参を主目的としたものであったから、この時の芭蕉の胸の中では、母を悲しむ心が思郷の念をさらにかきたてていたことだろう。

何事も昔に替りて、はらからの鬢白く眉皺寄て、只命有てとのみ云て言葉はなきに、このかみの守袋をほどきて、母の白髪おがめよ、浦島の子が玉手箱、汝がまゆもやゝ老たりと、しばらくなきて、

手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜

紀行文中のピークをなすこの一節が語るものは、単に亡き母への思慕とのみでは過ぎられない、深刻なものがあるように思われる。

四 被棄者

芭蕉が故郷を出た理由については、さまざまの憶測や見解がある。

しかし要するに、無足人級の半土半農の貧乏家庭の二男坊に生れた者の当然迎るべき道を迎ったまでのことではなかったのか。一度は上野在住の藩の侍大将藤堂新七郎家の嗣子良忠（蟬吟）に仕えることができたのはその身分として望外の僥倖ともいふべき好運であつたろうが、主人の夭折にあつてその好運もはかない夢と消えたとき、彼に残された道は、郷里にとどまり他家の養子に甘んずるか、他郷に生きる道を求める賭けに出るかの二者いずれかを選ぶほかはなかったらう。

芭蕉在郷当時の伊賀が早魃かんばつによる極度の困窮・疲弊にあえいでいた事実については、富山奏氏の精細な報告がこれを示している。（注5）

貧乏士分の二男坊がぶらぶらしていられる状態ではなかったことがよくわかる。そこであえて他郷に出る道を選んだ青年芭蕉は、恐らく完全平凡な養子になる道を選ぶようにとの肉身たち殊に母の切なる要請を斥けることで、義理と情に背いたという負い目をいつまでも忘れることはできなかったであらう。あるいは恋愛事件がからんでいたと想像することも無稽とのみ笑い捨てることもできないようである。

江戸に出るにあたって、彼が勃々たる野心に燃えていたことは、出府直後、自撰句合せ『貝おほひ』を自費出版して世に問うている事実からも推測できる。しかし、その野心も裏返してみれば、自ら家郷を捨てたという事実のも一つ奥にある、家郷から余計者・余され者として棄てられ、はじき出されたという無念と痛恨とが潜んでいたのによろというところもまた十分に推察できるだろう。負けるものか、石にかじりついてもひとかどの者になつてみせよう、というような気負いはその無念と痛恨とに向けられた反撥心である。

そういう反面、余され者・被棄者の自覚からして、世俗に背いて僧門に入ろうと考へたこともあつたろう。後年の「一たびは仏籬り祖室とびらの扉に入らむとせしも」『幻住庵記』という述懐は真実を語っているのだろう。彼が世外者たる俳諧師を志した理由も、蟬吟に仕えていたとき嗜んだこの道に心のすすみが強かつたということもあつたろうが、一面では余され者・被棄者の劣等意識・被虐意識から、あえて反秩序的な世外者への道を選んだということも十分考えられる。

現世の外に出ようとしながら、名を成そうとするのは、明らかな矛盾である。そこに彼のやりきれぬコンプレックスがまざまざと露呈されていくのを見る思いがする。

流れ者として入り込んだ江戸で艱難辛苦の末にようやく俳諧師として自立できるようになったとき、彼はその矛盾に気づき始める。

延宝八年（三十七歳）の深川転居は、世俗的生活者としての挫折感によるとも説かれる。そして、芸術家的な自覚から芸術即人生の立場

を確立しようと決意し、「現実功利の世を背いて隠遁者の境涯」(注9)に入り込んでいくためのワンステップを踏み出したものと解せられる。それらの基盤として唐宋の詩人たちの反俗的姿勢や莊子または禅学から学んだものが大いにあずかっていたことも指摘されている。

それらの見解はすべて正しいであろう。しかし要は、そうした彼の心理の最も根源をなしている例の被棄者意識、劣等感となって彼を苦しめぬいたこの暗い深層意識を、ここで肯定して、そこに胡坐あぐらをかき腰を据える方向に精神が深まってきたとき、彼は反俗的隠遁者たることに心を決したということになるのではないか。

かくて、彼はここで根源的な矛盾を截断する挙に出る。これには禅学の影響がかなりあるような気がする。世俗的なものの一切を捨てて世外の隠遁者となることによって、風雅一筋の人となろう——風狂に徹しよう——との決意である。「風雅の魔神」(「栖居之弁」)という内なるデーモンの存在に一切を委ねようと考え始めたといってもよい。被棄者意識もようやくこの風狂精神の中に摂せられていく。

深川退隱を契機として、全人間的に彼は一転機を迎える。

雪の朝独り干鯉からぎけを啗得たり

などに見える隠者的ポーズ、風狂的ポーズ(注7)も、この方向に進むうと決意した当初の心の気負いから出たものである。

右の「雪の朝」の発句などから一二年後の執筆と見られる次の文章は、深川退居後の芭蕉の心境を語る一資料である。

寒夜ノ辞

深川三またの辺りに草庵を脩むて、遠くは土峯の雪をのぞみ、ちかくは万里の船をうかぶ。あさぼらけ漕行船のあとに浪に、芦の枯葉の夢とふく風もや、暮過るほど、月に坐しては空むなしき樽をかこち枕によりては薄うきふすまを愁うれふ。

艚つこの声波を打て腸氷はらわたる夜や涙

中国の詩文やわが国の隠者文学から学んだ跡の明らかな、隠者的ポーズの多い文章ではあるが、声調に現れる心情は郷愁の思い以外の何物でもないのであって、被棄者の悲しみをじかに聞く思いがある。風狂精神を構築する要素の一つに被棄者の悲しみがあつたことの一証左とされよう。

五 伊賀上野と湖南

伊賀上野は伊賀盆地(上野盆地)の中心をなす城下町である。このこぢんまりと整った相貌をもち、閉鎖的に感ぜられる盆地の中心市邑は、他国者には拒否的な冷たさを見せるが、そこに生れ育つた者にとっては、しみじみとなつかしい、血肉の底の底までを組成している郷土たり得る風土であろう。

こうした故郷を捨てた者の、また棄てられた者の悲劇は筆舌に尽し難いであろう。しかし一度捨て去つた以上、再び猫のように古巢にもぐり込むことを望むわけにはいかない。たとい故郷が喜んで迎えてくれるといっても、これを甘受することは胸奥の聲が拒否している。自

己に忠実だった詩人芭蕉はこの声に聴従して、あくまで棄てられ者の道を歩むよりほかはないと志を決めているのである。

なおここで注意したいことは、年少にして小身ながら武士のはしくれであった芭蕉には、自己抑制を徳とするストイックな一面があったということである。渴く者のように故郷を慕い、引き寄せられながら故郷に安住することを否定しつづけた理由の一つにはこのことがあったように思われる。

せっかく故郷に足を踏み入れても、そこに長く留まることのできなかった代りに、芭蕉はあちこちと目まぐるしいほどに歩いている。そのことに関して通説では、芭蕉は郷里にさえおちつけなほほど漂泊の思いに駆られつづけていたとされている。漂泊の詩人像を築き上げるにはおあつらえむきな解釈である。

私の見解はいささか異なる。彼にとっては、気持の上で居づらい伊賀上野市内にいるよりは、拡大された郷里ともいべき畿内を歩き回っているほうが心安まるものがあつたのであろう。だから畿内の旅は——芭蕉自身旅と呼んではいるが——実は散策とでもいったほうがいいほどの趣を呈している。これは江戸在住中の動静と比較すればよくわかる。江戸では彼はほとんど歩いた形跡がない。鹿島詣での旅を除いては、鎌倉・江の島にすら行っていないようである。江戸は現実生活の場にしか値いしていなかったということだろう。

いうまでもないが、もともと芭蕉は上方人であつたから、粗暴な、武張った江戸よりは、上方がずっと肌になじんだ。だから、商都大阪

を別として、近畿にある限りしみじみと楽しく気楽でありえたに違いない。とりわけて彼を惹き付け、真の第二の故郷となりやがて墳墓の地となつたのは湖南であつた。なかんづく膳所は落着いた小城下町で芭蕉をして「偏ニ膳所は旧里のごとく被^{ひと}存申候」(元祿四年、曲水宛書簡)と言わしめた。さらに木曾塚(義仲寺)は湖面に臨んだ閑雅明媚な佳境である。(今日は埋立工事のため湖畔から遠く離れてしまっているが)。芭蕉の愛着のひとしお深かつたこともうなずける。因みに江戸深川の草庵にしても、隅田川に面した閑寂温雅な佳境であつた点が彼を惹きつけたのだらうと思われる。(今日では滄桑の変で、見るに耐えぬ素漠雑騒の街巷と化しているが)。芭蕉が広やかな水のほとりを愛したことは疑いのないことである。

六 故郷との関わり

芭蕉と故郷との関係について論じた諸家の文章のうち私の関心を惹いたものを整理して紹介すると次のとおりである。

まず加藤楸邨氏は、芭蕉の旅が「故郷を行動の軸心にして」点を指摘し、その故郷の情の中核が母にあることを把握している。そしてさらに、「故郷離れ」という遠心的な心的過程を経て、逆に故郷への求心的な傾きが強くなっているとも言っている。(注8)

この加藤氏の評論は、故郷の持つ意義を最も大きく評価したものであり、私のこの小論と主旨を等しくしているものであることを私は喜びとしたい。

次に時期的には前に戻るが、故小宮豊隆氏の論文に、

芭蕉には「故郷」がなかった。勿論生れ故郷のない者はないが、しかし絶えず懐しきを持って思い返し、敗残の身でもそこでなら安んじて身を横たえることのできる「故郷」がなかった。(『芭蕉と紀行文』(注9))

とある。そしてそのことについて、続けて、貞享四年冬の『句錢別』で素堂が芭蕉のことについて伝える「老人常謂他郷即我郷」という語を挙げてその証としている。

ただこの「他郷即我郷」から、芭蕉が故郷を持たなかったと結論するのは問題である。故郷という意識を本来持たぬものが、「他郷」とか「我郷」とか言うはずはない。「我郷」を愛すること異常に深く、しかも「我郷」から離れざるを得ないものでなければ、わざわざ「他郷即我郷」と口に出して標榜するはずはないのである。この語からいえることは、敗残の身をも安んじて横たえ得る故郷を持たなかったということにとどまる。懐しきを持って思い返す故郷は、芭蕉は心の奥深く潜めていたのではなかったか。

故阿部喜三男氏は、この小宮論文を拠りどころとして、芭蕉の「無故郷性」ということを言っている。(注10) 芭蕉の意識について言われたものように思われるが、いずれにしても誤解される恐れが多分にある表現ではなからうか。芭蕉の「無故郷」には複雑な心の曲折があることを十分考えてかからねばならない。

最後に「故郷喪失者説」とでもいふべきものが、松田修氏によって

提出されている。同氏によれば、父与左衛門の代に伊賀の拓植から上野に移住した半士半農の松尾家は、ムラやマチの共同体から断絶した流れ者・よそ者・「世界の紛者(荻生徂徠の語)」であって、すでにこの一家が永遠の故郷喪失者だったというのである。(注11) 従って芭蕉は二重の故郷喪失者となつていられるといわれよう。

この説に因んで贅言すれば、巷間に流布する芭蕉忍者説はむしろ荒唐無稽であるが、少なくとも忍者という集団は、右のように公共社会から断絶され故郷喪失者たる運命を負わされた一族であったことは確かである。松尾一家の何やら暗い方にはどこやらに伊賀忍者一族的な影がないともいえないことだけはいうるのではなからうか。

それはとにかく、芭蕉が自分を流れ者にしてゆく精神の悲劇的過程の中には、未生の昔からの故郷喪失者の暗い血の流れがあったという松田説の指摘は、われわれの心にひびくものがある。

七 捨 子

『野ざらし紀行』の冒頭部分に続くところに、

富士川のほとりを行に、三つ計なる捨子の哀げに泣有。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたえず、露計の命待まど捨置けむ、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂より喰物なげてとをるに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝ちゝに悪まれたるか、母にうとまれたるか。ちゝは汝を悪にあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性さがのつたなきなげ。

とある一節はあまねく知られている。

芭蕉の精神の姿勢を明かす上で重要なものとしてやかましい論議の交わされているところである。まずこの一条が虚構かどうかが論議的になっているが、芭蕉の心を触発するだけの事実は何ほどかあったろうというぐらゐのところを片づけておきたい。

私の関心は専ら、絶大の情を傾けて捨子を憐んだ芭蕉の心の姿勢に向けられている。

この一節について芭蕉の心を問題にした見解の中には、これを虚構と見る立場で、寿貞を捨て、子を捨てて生きていかねばならぬ自分の運命への痛恨を表わしたと見る説(注12)、あるいは、無常の風の前の人間存在としての芭蕉自身の身の上を嘆いたと見る説(注13)など、いろいろ論ぜられている。私の考えも芭蕉自身の痛恨であり、嘆きであるという点では同感であるが、そう考える意味の点では大分違っている。

家郷・肉身から棄てられた者と捨子と、この近似は余りにも付きすぎるほどである。被棄者たる天涯孤独の己れば、客観に移せば、哀れげに泣く捨子そのものではないか。捨子を目にした衝撃にあつて、胸奥に押し込められていた傷手がふと血を噴き上げ、裸かにされた神経が寒風の前に露出されたという感じの、句文の勢いに着目したい。

発句に続けて「いかにぞや、汝ちゝに悪まれたるか、母にうとまれたるか」と急迫して畳み込んでいく表現の異常な昂揚ぶりを見るがよい。芭蕉一代、これほどの激越の調べは他に求められない。己れ自身を嘆く思いのない限り、いかにすぐれた詩人といえどもこの感情の昂ぶりを偽って形象化できるはずはないのである。

打ち捨てられた自らを「父に悪まれたるか、母にうとまれたるか」と嘆き憤りはしてみるものの、しかし思い返せば、すべては父母・家郷の罪ではない。ただこれ不運な星のもとに生れ出た己れ自らの宿命のつたなきなのだと言ひ止めるほかはない。「唯これ天にして、汝が性のつたなきを泣け」とは、芭蕉自身に自ら言い聞かす諦めの言葉である。

いずれにせよ、発句の後の文章は、発句を出したことをきっかけとして、つい知らず洩らした芭蕉の悲しい真情だったという趣に受け取れる。そしてその「猿を聞人」の句は、文芸の虚の世界に生きようとする自分を、一度その生の被棄者としての現実世界に引き戻して、ぎりぎりの対決を迫ろうとした内奥の苦悶の試みであったのかも知れない。

前に掲げた『野ざらし紀行』中の「手にとらば」に付帯する前文中にある「只命有てのみ」の語に注目した前出小宮論文では、

「只命有てのみ」という言葉は、例えば「失われた子」として自覚する者が、面目もないさまで帰って来たような場合、口にするはずの言葉である。

と述べられている。小宮氏も注せられるように、この言葉は芭蕉が言ったものか兄弟が言ったものか判然としないが、いずれにせよ芭蕉の意識の中に厳存する言葉であることには変わりがない。捨子の条とあわせて見れば、芭蕉の心事も事情もあげて明らかであろう。

さらに紀行中美濃の条に出ている、常盤御前の墓に詣でて詠じた

義朝の心に似たり秋の風

の句の心も、父・兄弟をわが手で殺し、いままたわが子まで手にかけて家郷一族を離れて逃れゆく悲運の武将の敗残孤影の悲しみに、我れをよそえたものであつたらう。

八 野ざらしを心に

さて、順序としては逆になったが、『野ざらし紀行』冒頭の句、

野ざらしを心に風のしむ身哉

のことをいわねばならない。

野ざらしとは旅中に死に野に捨てられた白骨である。旅に生命を賭けた芭蕉の覚悟のほどが知られるとして、芭蕉の旅に言及するほどの人は必ずこの句に触れるのがすでに常識化している。

しかしこの常識的な見方には近年幾人かの人から疑問が提出されてきた。例えばこの句のみならずこの紀行全体に関して、「むしろそこには多分に風狂のポーズがあつたのではないか」とする宮本三郎氏の

説(注14)などを挙げる事ができる。私も宮本説にほぼ同感を表する立場をとる者である。

四十一歳の芭蕉の、東海道筋の旅が、死を覚悟しなければならぬほどの条件のもとにあつたとは思われぬ。しかも千里ちりという旅慣れた同行者が身の回りの世話をしてくれる。その上数年前に一度帰省の旅を果した経験もあることである。この旅の首途に野ざらしになることを覚悟するのはどう考えても大げさすぎる。

まして前文にある「千里に旅立て、路糧かてをつままず、三更月下無何に入と云けむ、むかしの人の杖にすがりて」の語句の解釈にかかわって禅僧の出身にも比すべき一大決意の表白と見たり(注15)、あるいは禅僧の無為の至境にあこがれていると見たり(注16)するのも、何かおちつかないところがある。殊に後の解は、野ざらしを覚悟しているという発句の悲壮さとそぐわないうらみがある。

そもそもこの首途の発句を真正面から受けて、深刻に解し、悲愴な決意の表明のように見ようとするのは、芭蕉に対する先入観にとらわれたための気負いすぎなのである。この句はもっと文芸的ないし俳諧的に解したほうがよさそうである。この句が、郷里伊賀に足を休めた後、大垣の木因亭に着いての句

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

と照応していることはだれも知っているが、この照応には俳諧的のおかしみが潜められている。「野ざらしを心に」などと大げさな、ひど

く悲壮がった首途をしたのに、いざ旅を半ば終って一つの目的地に着いてみると、別段死にもせず、風狂放浪を続けたまま、ここにこうして呆けたように現実^{ほん}に頹落して虚しく生きているという自嘲を交じえて、イローニッシュな笑いを洩らしているのである。

そしてさらには、紀行の結びの

夏衣いまだ虱^{しらみ}をとりつくさず

とも遙かに照応して、一編に統一を与えているのであって、その俳諧性・虚構性・風狂性は一目瞭然である。

これは、この紀行文を貫いて流れている風狂の心と全く同質であつて、例の

狂句木枯の身は竹斎に似たる哉

の句なども共通の俳諧世界を形造っている。

以上のように、この句は文芸性・虚構性の強い俳諧的作品と見られるのであるが、ただしこれを旅に関する境涯表白の詩であるという見方を立てば、それなりに切実であり、シリアスなものを十分持っていると思われる。そしてこの句が表わしている一種激越悲愴な調べないし情感には、文芸として偽るべからざる真实性がある。言葉の意味の上ではどんな偽りも言えるが、調べを欺くことまではできないといふのが、文芸の本性である。

それではその激越悲愴の調べをなさしめたものは何であるか。

これには、一例をあげれば、一所不住の風狂の旅に生きようとする理念と、これを否定して現実につなぎとめようとする心との相剋に、内的動機をとらえようとする弥吉菅一氏の説(注17)などが参考になる。

私はこの弥吉説に敬意を表するものだが、その旅に生きようとの理念のもう一つ奥にある被棄者の切ない郷愁を指摘する立場を強調したい。すなわち、「野ざらし」の句は、被棄者⇨棄業者⇨放浪者の、悲愴寥々な心の姿をそのままに写し出したものという見方をすることである。

これは『野ざらし紀行』全体についても言えることで、風狂性を主調とした俳諧性の強い文芸作品ではあるけれども、その反面、やむにやまれぬ内奥の衝迫としての被棄者の恨みや悲しみが郷愁と交じりあって、古傷から血を噴くようにふき出して、一種激越悲愴の声調をなしたということができよう。

野ざらしの旅を終って芭蕉が気づいたことは、旅というものがいかに自分を純化し革新するかということの自覚であった。深川退隱以来思いつづけてきたことのいっさいは、旅することによって成就できるという見通しである。

唐宋の詩人や西行・宗祇等の隱遁者の世界も、老荘の徒や禅僧の世界も、風雅の世界と一つに融けつつ、あげて旅の中に統一され、顕現されてくる。しかも被棄者たる運命的な彼の生は、旅することを本質的な必然において求める。つまり、一所不住の行脚の精神に導かれた

風狂の旅こそが、彼のいっさいを生かすものと自覚されてきたのである。

『野ざらし紀行』は未熟な作品ではあるけれども、少なくともこの旅を終わった時点で執筆されたもので、芭蕉の旅に対する姿勢を語っている点で、重視すべきものたるを失わないと私は思う。

この紀行執筆を頂点として、芭蕉の郷愁の激情はしだいに沈静してゆく。旅の意義を悟り、生の姿勢が確立してゆくとつれて、被乗者意識も深化して、風狂の漂泊者たる生き方の中に発展的に解消してゆくのである。

(未完)

(注)

- (1) 土芳『芭蕉翁全伝』・阿部正美『芭蕉伝記考説』など
- (2) 米谷巖『野ざらし紀行』における芭蕉―大垣以前と以後―(『近世文芸稿』第十号、昭和四一年七月)
- (3) 米谷巖『笈の小文／更科紀行』(『国文学』四四年一〇月号)
- (4) 米谷巖『野ざらし紀行』における芭蕉(前出)
- (5) 富山泰『芭蕉と郷土』(『芭蕉の本1・作家の基盤』)
- (6) 宮本三郎・今栄蔵『松尾芭蕉』
- (7) 井本農一『芭蕉評伝』(校本芭蕉全集第九卷) など
- (8) 加藤楸邨『詩人の生涯―芭蕉への通路―』(『芭蕉の本2 詩人の生涯』)
- (9) 小宮豊隆『芭蕉と紀行文』(『古典日本文学全集31・松尾芭蕉集下』所収)
- (10) 阿部喜三男『芭蕉の旅』(『芭蕉の本6・漂泊の魂』)
- (11) 松田修『芭蕉の悲劇性』(『芭蕉の本2・詩人の生涯』)
- (12) 広末保『日本文学の古典』

- (13) 堀信夫『永遠の旅人』(『芭蕉の本6・漂泊の魂』)
- (14) 宮本三郎『芭蕉論の争点』(『日本文学の争点・近世編』)
- (15) 赤羽学『野晒紀行と江湖風月集』(『連歌俳諧研究』第九号、昭二九・一一月)
- (16) 高橋庄次『野ざらし紀行』(『国文学』昭四〇・一〇月号) など。
- (17) 弥吉晋一『野ざらし紀行論』(『芭蕉の本6・漂泊の魂』)

(文芸科教授)